

《研究ノート》

撫牛の衰退と変容  
— 近現代間における比較を通して —

茶圓 直人

はじめに

日本において民間信仰を心から信じている人は少ないだろう。しかしそれは、日本において民間信仰が廃れたということの意味するわけではない。「伝統だから」とか、「とりあえず」などといって、ドアや壁に御札を貼る家もまだまだ多く存在するように、民間信仰は日本の至る所で見られる。一口に民間信仰と言っても儀式を伴うものや仏教などの宗教の枠組み内に収まっているものなど多岐にわたり、ここではまじないや俗信、ジンクスなどの総称として用いる。

民間信仰のなかで、比較的広く人々に認知されているのは縁起物の部類だろう。ここで念のため、縁起物の定義について触れておく。國學院大學日本文化研究所編『神道事典』によると、縁起を一般に「物事が起こる前の吉凶の兆候」、縁起物を「年初や縁日などの折に参詣人が縁起を祝うために買い求める吉兆の品を指す」とし、岩本裕著『日本佛教語辞典』では、縁起を「吉凶の前兆」、縁起物を「縁起を祝うために、縁起棚に載せる達磨とか招き猫など」としている。このように、縁起物は神道と仏教で全く区別されておらず、縁起物とは吉凶の品物であると言い換えることができるだろう。

この縁起物の1つとして、「撫牛」がある。撫牛とは、牛の像を撫でると縁起が良くな

るといわれているものである。全国各地の神社や寺で見られるが、最もよく知られるのは、菅原道真を祭神とした天満宮や天神社の撫牛だろう。この撫牛は石や御影石、銅などで作られ、幅 1m 強と、持ち上げることもままならないほど大きい。また、地蔵菩薩のように涎掛けがかけてあることが多い。このような撫牛は天満宮や天神社以外でも見ることができ、その効能は開運、病気の平癒、学問成就のいずれかである場合が多いが、その寺社に合わせた信仰を持つ。

一方で、現在あまり見ることができないが、幅約 15cm の前述と比べてかなり小さな撫牛も存在している。この撫牛は先の撫牛とはその特徴において大きく異なる。便宜上、先の撫牛を「大きな撫牛」、この撫牛を「小さな撫牛」と呼び分けるが、小さな撫牛はその大きさのみならず、土焼で作られ、牛の額部分には大黒天像、もしくは 3 つの珠があしらわれていることが多い。また、大きな撫牛は寺社への参詣の折に撫でるものであるが、小さな撫牛は寺社で買い求め、参詣客の自宅で撫でるものであり、信仰の場という点でも異なると言える。さらに、小さな撫牛は涎掛けを使うことはなく、代わりに、下に座布団を敷くという特徴を持つものも多い。

小さな撫牛はあまり見られず、一般的にも認知されているとは言い難いものの、現代において異なる 2 種類の撫牛が共存していると言えるだろう。しかし、明らかに異なる 2 つの縁起物を「牛の像を撫でる」という 1 点において同一視するのはいささか強引なように思える。2 つの撫牛はいつ、どのように交わり、同一視されたのか。拙稿では、近代までの撫牛を分析したが、そこに大きな撫牛はほとんど現れなかった<sup>1</sup>。そこで、本稿では主に文献調査によって現代の撫牛の実態を調査した後、近現代間の比較を行うことで、撫牛の変遷過程について論じる。

## 1. 近代までの撫牛

本章では先に挙げた拙稿をもとに、近代までの撫牛についてまとめる。なお、ここでは第二次世界大戦勃発前までを近代とする。まず、撫牛の文献上の初出を、1746 年に保寿軒という伏見の人形窯元が記した縁起書である「本家伝来開運撫牛縁起」<sup>2</sup>と、それに対抗するようにして木村虎悦の名前で 1747 年に出された「神授開運撫牛縁起」<sup>3</sup>とし、撫牛の起源を伏見人形に求めた。その後、田沼意次の出世に絡められた撫牛の噂の流布や遊郭で流行していた様子などを中心に、江戸時代における撫牛について記述した。さらに、様々な寺社で撫牛を頒布していたという事例から、撫牛は職業や地域に限定されるものではなく、近代までにおける撫牛が現代よりも盛んに信仰されていたことを明らかにした。

そして、近代までにおける撫牛の特徴について、4 つの特徴を指摘した。まず 1 つ目は近代までにおける撫牛の多くが、大黒天信仰を背景とし、蒲団を用いるものであった点で

ある。これは先に述べた保寿軒によって生産されていた撫牛の特徴と一致したため、撫牛の販売競争において木村家よりも保寿軒のほうが優勢であったと考察した。2 つ目は特定の対象者ではなく、広く一般に普及していたと考えられる点である。この点は前述の通り、撫牛は特に遊郭で流行していたという形跡も見られたが、その範囲は遊郭だけでなく江戸市井や上方地方に加え、地方の寺社で頒布する事例も見られた。そのため、対象が限定されるような縁起物ではないと考えた。3 つ目は近代までの撫牛は持ち運ぶことのできるサイズで、販売、もしくは頒布されるものだったという点である。近代までの撫牛をめぐる言説において、撫牛という語が指し示すものは小さな撫牛であった。江戸時代の洒落本から浮世絵、昭和初期に編纂された辞書まで、撫牛とは小さな土焼の臥牛であった。そのため、4 つ目の特徴として、近代までにおいて、大きな撫牛についての記述や天神信仰との関わりを示す確たる資料は見られなかった点が挙げられる。大きな撫牛の代表格として天満宮や天神社の撫牛が挙げられるが、近代までの資料において天神信仰を背景とした撫牛は見られず、また大きな撫牛もほとんど見ることはできなかった。

拙稿では以上のように近代までの撫牛について整理し、近代までは撫牛の主流と呼ぶべきは小さな撫牛であったと結論付けた。ここで、近代までの撫牛の一例として、保寿軒による縁起書を以下に引用したい。

#### 開運撫牛縁起<sup>4</sup>

「抑この撫牛といへるは尊位の御家伝たる事年久しむかし尊位に造願し奉り命によつて伝来のごとく御伝法を以て撫牛を造りさし上るにますます其後かそへかたし世に引求乞人しきり也、然るに其伝来故有之予家に相祭りし玉へり今に子孫に伝へ来るを以て造り願ふ人に譲るなり。」

#### 開運祭の伝

「つねに居間に卓やうのもの或はちがひ棚などにすへ置しん願たなこころなく大黒天を念し常に此牛をなでさするときは吉事日にまし家運誠に広大に靈功あり牛相応のふとんをしき其上に祭りて吉事ごとにつづつまして祭也。又牛の日毎にあづきもちをそなへさげ初穂はまづ祭る人家いただき其余ハ心にかますべし其他何によらず他より来る品をそなへる也。祭る人家のはんゑい心にまなるべし」

#### 出世大黒天祭の法

「世に大黒天は実に高貴の作にて則  
御影御守此牛の頭に勧請し奉る事なり其心を以て広くつねづねなでさすり志願をいのるなり

甲子のばんは煎茶を供し其茶をそまつにせずして一人いただき外の人々のぶる事なし

右の牛をうけてより初の甲子黄色染木綿のふとんに置き財布を自身縫て牛の腹に入甲子毎に小玉銀にても一つづつくつにても納め置き其内主人又目うへの人に金銀財宝を得て増ます納め玉へと 敬 白

延享三年亥十一月吉日

城州伏見海道稻荷前黒門角

保 寿 軒<sup>5</sup>

下線部のように、机や棚などに置かれていた点、蒲団が下に敷かれていた点から、これらは小さな撫牛であったことは想像に難くない。本稿でも、近代までの撫牛のほとんどが上記に類するものであったと考える。

## 2. 現代の撫牛

本章では、現代に残っている撫牛について記述していく。まず、他ではあまり見られないが、小さな撫牛として妙円寺松ヶ崎大黒天に掲示されている撫牛の縁起書を以下に引用する。ふりがながかなり自由だが、すべて原文ママである。

開運大黒天 撫牛授与之縁起  
 抑も当山は、京洛の北、子丑の方位に当り大黒天勸請の適地なるを以て開山  
 日英聖人の代、此靈神を感得祭祀せらるるや常に宝前に臥牛の像を安置して日夜  
 に祈念し給う。当時洛陽の商人某聖人の高德を慕い来りて教を請く。或日  
 堂内に臥牛の像を安置せるを見怪みて其故を問ふ。聖人懇ろに其縁起を示し  
 給う。某直ちに其像を買求めて開眼を請う、聖人即ち丑年丑月丑日丑刻  
 に開眼して授与せらる。其人信受供養したれば家運日に繁昌し数年を出ずして  
 陶 猗の富を致せりと。此事普く世人の知る所となり、来りて請うもの甚だ多  
 く遂に例となりて今日に及べり。  
 撫牛と開運 此牛の眉間には大黒天神の像を戴き、肩上に三個の宝珠を負うて  
 開運の吉相を象れば、子丑の支神とも称す。神棚床の間 或は座右卓上に置き、常  
 に大黒天を念じて此牛を撫で摩る時は運命次第に開け所願成就するものなり。  
 去れば之を開運の撫牛と云う。

臥牛と魔除 此牛の像は、甲子の吉日丑刻に大黒天神の宝前に於て開眼せし  
 ものなれば、信念の力能く悪魔の障碍を除き吉事自ら至る。依て、之を魔除の  
 臥牛と云う。

病難除と臥牛 若し身体に病痛を感ずる時は、特に大黒天を祈念して此牛を摩

すれば病難症傷自然に消滅す。故に病難除の臥牛とも云うなり。  
 甲子と撫牛 信者此撫牛を請けて黄染木綿の蒲団を敷き財布を此牛の腹中に  
 入れ甲子毎に金銀貨小玉の類を一個づつ入れ納めて大黒天を祭り、此牛を撫で摩  
 りて祈念すれば災難病魔を排うて運命強く自然に財宝を得家内益々繁榮す  
 深く信受すべきものなり。

下線部のように、神棚や机などに置かれていた点、蒲団が下に敷かれていた点から、保寿軒の撫牛と同系統の撫牛であると言える。特徴的なのは財布を撫牛の腹の中に入れるという点だが、この点も保寿軒の縁起と一致する。また、開運、魔除け、病難除けの効能を持ち、大黒天信仰を背景としているが、おそらくこれは妙円寺松ヶ崎大黒天が大黒天を本尊としていることが主な要因であろう。甲子の日を重要視し、大黒天信仰との接合を深め、その福神的な性格を撫牛に色濃く反映させている。さらに、撫牛は「子丑の支神」とされていることから、大黒天の「支神」と考えてよいだろう。しかし、効能の発揮のためには撫牛を撫でるだけでは足りないようである。「常に大黒天を念じて此牛を撫で摩る」とあるように、撫牛は大黒天に祈りながら撫でることによってはじめてその効能を発揮するようだ。この縁起書がいつ記されたかは不明だが、川崎巨泉が大正8年(1919年)から昭和7年(1932年)にかけて全国の玩具を収集、編纂した『巨泉玩具帖』において、「松ヶ崎大黒天より出す撫牛」<sup>6</sup>を報告しているため、少なくとも昭和初期には撫牛を祀っていたと考えられる。このように妙円寺松ヶ崎大黒天の撫牛は近代までの撫牛の流れを引き継いだものと言えよう。

また、天満宮においても小さな撫牛が頒布されていることがある。京都府北野天満宮には大きな撫牛が安置されているが、それを模したものとして小さな撫牛が頒布されている。また、栃木県高鳥天満宮では、大きな撫牛は安置されていないが、小さな撫牛が頒布されている。その様子を示すため、以下に毎日新聞地方版／栃木1995年1月27日の記事を引用する。

(前略)

【メモ】「学問の神様」菅原道真は丑<sup>(ママ)</sup>うし年の丑の日に生まれ、丑の日に亡くなったという。また、左遷された道中で、賊の待ち伏せにあったが、牛車の牛によって難を免れたとも伝えられている。このため、牛は天神様の「おつかい」とされている。高鳥天満宮は「願かけなで牛」を参拝の時、神前に。土で制作した臥牛の像は、学芸上達、入試合格、厄払いのために机、床の間に置きながらの祈願が良いとしている。

(後略)<sup>7</sup>

天神信仰における撫牛の多くは銅製、もしくは石製の大きな撫牛であるが、ここでは土製の小さな撫牛である。効能は「学芸上達、入試合格、厄払い」であり、天神信仰の学業成就や厄除けの神格と一致する。また、天神信仰において牛が神使として扱われていることと撫牛を頒布していることが関係していることを示唆した記事となっている。ここでは天満宮においても小さな撫牛を頒布する事例はあるということを示唆したい。

次に大きな撫牛として、大阪府の露天神社に安置されている撫牛についての立て札を引用する。

#### 神牛舎

「神牛さん」「撫で牛さん」と呼ばれ、己が身体の病む処と、神牛さんとを交互に撫で摩り、身代わりになっていただく。

又は、神牛さんの霊力をもって病を治癒して戴く、という信仰が古来より続いている。

昨今は、より頭脳明晰にならんとし、勉学に励み、又、受験を控える学生も多数参詣される。

#### 菅原道真公(天神さん)と神牛さん

菅原道真公の御生誕が、丑の年にあたる承和十二年六月二十五日の丑の刻にして、薨去の後、太宰府にて初めて祭祀を営まれたのも、延喜五年八月十九日という丑の年、丑の日でありました。

又、御存命中こよなく牛を愛で給い、或る夜、奇夢をごらんになられてより、一層牛を大切になされ、自ら牛の姿を画かれて、これを日常親しく祀られたと伝えられる。

ここでは、より直接的に天神信仰における牛の重要性から撫牛を祀っていることを説明している。病気の平癒を主な効能とし、さらには学業成就にまでその効能は及び、それらは撫牛が身代わりになることや撫牛自体に認められた霊力によって発揮される（下線部参照）。ここで興味深い点は「昨今は、より頭脳明晰にならんとし、勉学に励み、又、受験を控える学生も多数参詣される。」とされている点である。これは天神信仰の学問成就が撫牛にも期待され始めたということであろう。この立て札がいつ作られたのかは分からないが、撫牛による学問成就是比較的新しい効能である可能性は考慮すべきであろう。次に、他の天神社を見てみる。以下は毎日新聞東京夕刊 1994 年 9 月 2 日の記事であるが、ここでは、天神社における大きな撫牛について記述されている。

(前略) 横浜市磯子区岡村 2 丁目、岡村天神のなで牛=同 (右) (下)=<sup>8</sup>は 1909 (明

治 42) 年に造られた。菅原道真(天神様)が亡くなった時、遺体を運んでいた牛が悲しみのあまり動けなくなってしまった。天神様と牛は深い縁で結ばれている。こちらは受験生向き。道真は学問の神様だから、頭をなでるとよい。

東京都国立市の谷保天満宮にも 1973 (昭和 48) 年に牛の寝姿像=同 (左) (下) =ができた。いわれは岡村天神と同じ。とにかく、牛は寝姿がよろしい。<sup>9</sup>

この記事のなかで撫牛の効能は学業成就とされている。しかし、先に紹介した露天神社の説明では、病気の平癒という信仰を「古来より続いている」ものとして、学業成就を比較的新しいものとしており、これが正しいとすれば、この記事は比較的新しい信仰を信じ切っけてしまい、もともとの古い信仰(病気の平癒)を忘れてしまっているという解釈になる。ここでは、どちらが正しい信仰なのかということではなく、どちらにせよ、撫牛の信仰に変化が起きているという点に注目したい。また、撫牛が作られた年が明確に記されているが、その根拠は分からない。次に、毎日新聞大阪朝刊の 1998 年 2 月 17 日の記事を見てほしい。

学問の神様として知られる大阪天満宮(大阪市北区)境内にある神牛(しんぎゅう)像の頭をなでる参拝者が急増し、緑青色の金属製の頭がピカピカになる人気ぶり。

◇各地の天満宮では「なで牛をなでれば、頭が良くなる」と信仰の対象だが、大阪天満宮には言い伝えはなかった。ところが、最近タウン誌に「御利益あり」と間違って掲載され、受験生の間で急にモテモテに。

◇天満宮側は戸惑いながらも「牛は、祭神の菅原道真ゆかりの神聖な動物。きつと効果がある」。新しい神様がまた増えた?<sup>10</sup>

下線部のように、大阪天満宮には撫牛の伝承はなかったということが書かれている。つまり、大阪天満宮では神牛像はあったものの、それは撫でる対象、すなわち撫牛ではなかったということになる。つまり、ここでは以下のようなプロセスを経て、撫牛が誕生したと考えられる。まず、全国各地の天満宮の牛の像は撫牛である(と思われている)ことから、大阪天満宮の牛の像も撫牛なのだろうと(人々もしくはタウン誌の記者によって)類推される。そして、その情報(噂)が広まり、多くの人々によって神牛像は撫牛とみなされ、その結果、大阪天満宮でも撫牛という信仰が生まれることとなる。この事例では、大きな撫牛の成立過程のなかで、人々による誤解が生じているという点を指摘できる。したがって、少なくとも大阪天満宮においては、大きな撫牛は人々の誤解のうえに成り立っているとと言えるだろう<sup>11</sup>。このような事例があると、先に引用した毎日新聞東京夕刊 1994 年

9月2日の記事も鵜呑みにはできない。神牛像として造られた牛の像が後に撫牛と解釈された可能性が考えられるからだ。

次に、天神信仰とは関わりのない大きな撫牛について述べる。以下に引用するのは、毎日新聞東京朝刊1971年7月14日の記事である。

言問橋を浅草の方から渡り切ると、右手の牛島神社の広い境内の片すみに牛がいる。といっても、文政八年（一八二五年）に牛島という名にちなんで、氏子が奉納した石造り。隅田川をさえぎる高いコンクリートの堤防、補植につぐ補植で若返った隅田公園の緑などすっかり変わった墨堤に、ひっそりと江戸の名残を見せている。

堀辰雄も「幼年時代」の点景に取り上げたこの“モー君”不思議な霊験をを持っているとか。なでると体はもちろん、心の病いも治り、首にかけたヨダレかけを赤ちゃんにつけるとスクスク育つ。

その霊験も戦後はあらたかでなくなった。「境内は野球場になって、ボールが鼻づらに当たる。バットがふり下ろされる。さんざんですよ。」と三代目の神主、春日健一さん（六九）はライラクに笑う。

でも、最近チョッピリ権威を回復し始めた。証拠は“サヤ堂”の柱にかけたおさい銭箱。わずかだが、上がりが多くなっている。原因は墨田区役所が昨年十二月たてた旧跡案内。境内の木陰を求めて集まるアベックたちが、足をとめるようになったからだ。

そのせいか、善男善女の手で玉石のように清められていた石のハダが油ぎってきたようだ。<sup>12</sup>

上記は、現在の東京都墨田区向島の牛嶋神社についてのコラムである。牛嶋神社は須佐之男命、天之穗日命、貞辰親王命を御祭神とする貞観二年（860年）に創建された名社である。ここの撫牛は文政8年に奉納されたとあるが、それは撫牛としての奉納だったのか、単なる牛の像としての奉納だったのか判断できない。しかし、「その霊験も戦後はあらたかでなくなった。」と言うからには戦前には撫牛として認知されていたように見える。また、ここからは第二次世界大戦を契機に人々の信心が離れたということも読み取れよう。この撫牛では、「ヨダレかけ」に特別な力を求めており、これは明らかに地蔵信仰と一致する。大きな撫牛の特徴として涎掛けをかけていることが多いことは既に述べたが、やはり撫牛は地蔵信仰の影響も受けているのだと考えられる。次に、毎日新聞地方版／三重の2005年2月21日の記事である。



なで牛：還暦迎えた住民ら 90 人、千種神社に奉納——菰野町 / 三重

◇子供の学業成就願い

還暦を迎えた菰野町千種地区の住民らが 20 日、触ると学業成就や病気平癒に御利益があるとされる「なで牛」を地元の千種神社（金津恒男宮司）に奉納した。

奉納したのは、60 年前に地元の小学校を卒業した同窓生や地区住民の有志ら約 90 人。このうち、12 人が発起人（伊藤信雄代表）となり、還暦祝いに奉納するものを金津宮司らと相談。その結果、将来を担う子供たちの学業成就を願って、なで牛を作ることにした。

なで牛は座牛で、横幅約 1.5 メートル。台座は地元産、本体は中国産の御影（みかげ）石で出来ている。この日は境内の一角に設置された、なで牛の前で金津宮司がおはらいをした後、除幕。還暦を迎えた住民らは早速、黒光りした牛を手で何度も触っていた。<sup>13</sup>

千種神社は天照大神、國之水分神、建速須佐之男命を祭神とする名社である。ここでは、撫牛を新たに奉納するという事例が見られた。この撫牛はもちろん大きな撫牛である。大阪天満宮の事例とは異なり、この牛の像は明らかに撫牛と認識されて奉納されている。宮司との相談のうえで、奉納するものを撫牛としたとのことで、現代の撫牛は今もなお、増え続けているということが指摘できる。また、撫牛の御利益として、学業成就が挙げられている点が興味深い。天満宮の撫牛は菅原道真の神使であるからこそ、学業成就が見込まれていたはずだが、菅原道真に関係のない撫牛にも学業成就が望まれており、ここにも撫牛信仰の変化が見られたと言えるだろう。

このように、現代においても変化し続けている撫牛であるが、本稿において着目したい点は現代において「撫牛」という語が指すものの多くが大きな撫牛である点である。もし小さな撫牛が人々の認識上にあれば、たとえ大きな撫牛についての記事の中でも、小さな撫牛についていくばくかの言及があってもおかしくないだろう。また、本稿の調査の一環として新聞データベースを活用したが、撫牛についての記事 43 件中、小さな撫牛についての記述は 5 件のみだったことからそれは指摘できる。<sup>14</sup>したがって、撫牛にまつわる言説が近代までにおいては小さな撫牛を指していたのに対して、現代においては主に大きな撫牛を指していると言えよう。

近代まではあまり見るができなかった大きな撫牛であるが、現代においては明らかに小さな撫牛よりも優勢であると言える。言い換えれば、小さな撫牛が全く見られないというわけではないが、近代より明らかに目立たなくなり、人々の認識から外れているように見える。このような変化は自然には起きず、何かしらの原因があると考えられる。次章

以降ではその原因について考察していく。

### 3. 近現代間における撫牛の変化

前章までは撫牛について近代までと現代に分けて述べてきた。本章では、近現代間事例の比較を行い、より具体的にその差異を述べていく。

まず、近代における天神社の撫牛を紹介する。以下は、大島氏によって報告された<sup>15</sup>、さがの人形館所蔵の撫牛の腹中に残っていた縁起書である<sup>16</sup>。

縁喜撫牛(福運者ハ誰?)[原文ママ]

◎乙丑ハ六十一年目ニ廻ッテ来ル最モ縁喜ノ好イ丑年デ此ノ年ニ当ッテハ古来縁喜ノ神トシテ撫牛ヲ祭リテ一家ノ福運ヲ祈ッテ来タモノデアリマス。此ノ年ニ作ッタ撫牛ヲお祭リスレバ禍ヲ転ジテ幸福ヲ得商賈繁昌無病息災家運長久ノ幸福ヲ招キ家畜類ニ至ルマデ無病安全ニシテ威大ナル神徳ノアルコトハ遠キ古ヨリ人ノヨク知ル処デアリマス。

◎此ノ牛ハ毎朝牛ノ背ヲ撫デー心ニ神ヲ念ジテ祈願スルモノデアリマス。然シテ御利益ヲ得ラレタルトキハ其ノ都度座布団ヲ作り撫牛ニ敷カセ願望成就ノ御礼トスルモノデアリマス。

◎本会ハ此ノ縁喜ニ因ンダ乙丑年ニ当リ広く此ノコウフクヲ頒タンガ為メ名工中原師ニ其ノ製作ヲ委ネ最モ由緒深キ坂上天満宮ニ於イテ々清祓ヲ受け是レヲ<sup>(ママ)</sup>頑布スルモノデアリマス。尚ホ本年皆サンノ御運試トシテ々御みくじガ付シテアリマス。御みくじハ撫牛ノ体内ニ入レテアリマスカラ御入用ナキ方ハ「ヤブラズ」御返シ下サイ。

◎頒布ハ坂上天満宮境内ニ於テ御希望ノ方ニ御頒チスルノデスガ混雑ヲ慮リ前以テ々持参御伺ヒ致セマスカラ是非一体ヲお祭リニナッテ神徳ヲ仰ガレンコトヲ。追頒布漏レノ御方ニハ御希望ニヨリ坂上天満宮境内ニ於テ来ル二月三日午後六時迄頒布致シマス。

◎尚ホ其ノ上皆サンノ福運ヲ深カラシメンガ為メ左記ノ通り抽籤ニヨリ福品ヲ差上マス。

撫牛一体ノ頒布料金参拾五銭也 壺体ニ付抽籤券壺枚差上マス。

福品ノ種類及ビ点数 (全数一五、<sup>(ママ)</sup>〇〇〇体ニ対シ)

一等 十八金製総丈五分大黒天尊像(但し俵ハ銀製) 九体 糸岐本店製作

二等 純銀製 全 黒天尊像 三十体

三等 陶器製 大黒天尊像 三百体 中原師製作

一白くじなし

◎福運抽籤方法ハ二月三日節分ノ夜坂上天満宮境内ニ於いて公平ニ執行シ、当籤番号ハ長崎日日新聞ニ広告致シマス。

◎詳細ナル規定ハ抽籤券ニ記入シアリ。

本博多町坂上天満宮境内

撫牛頒布会<sup>17</sup>

これはおそらく長崎県の坂上天満宮における大正 14 年（1925 年）の資料だと推測されるが、ここで注目したいのは、この縁起書が天満宮の事例でありながらも、菅原道真と牛の縁故という文脈で撫牛が語られていないという点である。先に見た通り、天神信仰では、牛は神使として重要視されているが、この事例は、撫牛一体につき、大黒天像が当たる抽籤券が 1 枚ついてくるといふしくみであり、そこからは撫牛と大黒天の関係性は感じさせるが、天神の神使とみなしているような印象は感じさせない。また、この撫牛は小さな撫牛であったが、北野天満宮や高鳥天満宮の小さな撫牛とも共通点が特に見られないことも留意したい。このように、天満宮という共通項では近現代間の撫牛に共通点は見られず、またそこに至る過程も読み解けない。次に、同一の寺社において、近現代間の比較を行う。

福島県の会津柳津福満虚空蔵菩薩円蔵寺には現在大きな撫牛が安置されている。まずは近代の資料として、大正 2 年（1913 年）に記された『柳津霊境誌』の記述を引用する。

略縁起伝に曰く、十二方に十二神あり、群生の本命を保護する神將たる諸佛諸菩薩の型跡ありて、各本願を垂れて衆生の希望を満足せしむ、仰ぎ惟るに、虚空蔵菩薩は、丑寅の方位に在りて、自在力を現ず、之れ菩薩の撫牛の縁故あるゆえん所以なり、然り而して撫牛の頂上に大黒天を勧請するは、抑も大黒天の本地虚空蔵菩薩にして、衆生の樂慾に随て、普門示現なればなり。<sup>18</sup>

ここでは、虚空蔵菩薩が丑寅の方位を司っていることが撫牛を祀る理由となっており、大黒天の本地が虚空蔵菩薩であることから、撫牛の頂上（おそらく額のことであろう）に大黒天を勧請しているなどといったことが記されている。つまり、この時点では撫牛の背景には虚空蔵信仰や大黒天信仰が想定されていたと言える。それに対して、現在、同寺境内に安置されている撫牛は一般的には赤べこ信仰の一つとして説明されている。赤べこは福島県会津地方の郷土玩具で、べこは東北の方言で牛という意味である。張り子人形の一種で、子どもの魔除けに効能を持つと言われているが、撫牛とは異なり、赤い牛の形をした赤べこを撫でることはしない。この赤べこと同寺に関わる民間伝承として以下の二

つのタイプがある。

大同（だいどう）2（807）年、徳一大師といわれる僧侶が福島県柳津（やないづ）町の福満虚空蔵（ふくまんこくうぞう）堂を建立する際に、重い材料などを黙々と運ぶ赤い牛がおり、完成前夜に石になって寺院の守り神になったという。<sup>19</sup>

本堂再建のため大材を巖上に運ぶのに大変困り果てていたところ、仏のお導きか、どこからともなく力強そうな赤毛の牛の群れが現れ、大材運搬に苦勞していた黒毛の牛を助け、見事虚空蔵堂（本堂）を建てることができたのです。<sup>20</sup>

このような伝承により、会津柳津福満虚空蔵菩薩円蔵寺では、赤い牛（赤べこ）が優勢であり、撫牛は赤い牛を模ったものとみなされている。つまり、ここでは撫牛と赤べこが完全に同一視されており、これらの伝承からは大黒天信仰との関係性を感じさせる文脈は見られない。『柳津霊境誌』が偽作であったという可能性は消しきれないが、ここでは、大正時代から現代にかけて、伝承の変化が生じている可能性を指摘したい。

次に、同じく福島県の岩角寺を紹介する。まず、近代の報告として、昭和10年（1935年）に刊行された佐藤潔の著書『玩具と縁起』では以下のように報告されている。

「岩角山観音の臥牛」

1、産地 安達郡和木澤村 2、用途 開運出世

例年舊正月初寅の日に出世開運の守として頒興さる。額に大黒天の像あり。裏に岩角山十座護摩開運撫牛と刻印あり。<sup>21</sup>

初寅の日の頒布という点が不可解ではあるが、虚空蔵信仰を背景としていたと考えれば、虚空蔵菩薩は丑寅の方位の守護仏であるのでそこから援用したのだと考えられる。しかし、「額に大黒天あり」とあるので、この撫牛の信仰背景は分からない。ここでは、撫牛はお守りとして頒布されていた点からやはり小さな撫牛であると考えられる。この岩角山についての現代の報告として、昭和42年（1967年）に刊行された『福島県史 第24巻 各論編 10 民俗2』を引用する。

「岩角毘沙門のなで牛（麿絶）」

安達郡白岩村岩角寺毘沙門堂祭礼の初寅の日に頒布される出世開運黒のなで牛で、額に大天の御影をいただいている。裏に岩角山十座護摩開運撫牛という刻印が押されて

いる。今は製作していない。<sup>22</sup>

こちらの報告では、撫牛は岩角寺毘沙門堂で頒布されており、また、場所が和木澤村の隣にあった白岩村とされており、先に挙げた事例とはまた異なる事例のように見えなくもない。しかし、両者の事例は、初寅の日に頒布すること、撫牛の裏に「岩角山十座護摩開運撫牛」という刻印が押されているという点で共通しているため、どちらも岩角寺が頒布していた撫牛であり、同じ事例であると考えられる。岩角寺は岩角山という山のなかに、観音堂や毘沙門堂など、いくつかの施設を持っており、おそらく岩角寺は村ごとに異なる施設で撫牛を頒布していたのではないだろうか。そして、両者の報告を比較すると、細かな違いが目につくものの、誤植や誤解の可能性も考えられるため、変化があったという確信は持てない。しかし昭和42年の時点では、撫牛の製作は行われていなかったようであり、約30年の間に撫牛は廃絶してしまったことが分かる。これだけでも撫牛の変遷過程において重要な事例であるのだが、さらに興味深いのは、この縁起物が復活している点である。以下に岩角寺のホームページの一部を引用する。

#### 撫牛

慈覚大師が東北地方御巡錫の砌り、この山の麓にさしかかり、山に入ろうとしたのですが、その当時は葦や雑草が生い茂る湿地帯で、人は容易に踏み入る事が出来ませんでした。そこで大師は里人に懇情し一頭の牛を借り受けて、ようやく当山に辿り着く事が出来たのでした。大師は牛を貸してくれた農家に心から礼を述べると共に、大師を乗せた牛に対しても感謝の気持ちを持ち、その牛を撫でられました。

牛馬にまでも深い愛情を垂れ賜った大師は、毘沙門天王の広前に臥した牛を石に刻み、記念に遺されたと伝えられています。臥した牛の頭の部分に大黒天の像が乗っているのが特徴的です。

その石像を撫でれば開運の御利益があり、それを模して今日では「岩角山毘沙門天千座護摩開運撫牛」として信者の方々へ頒布されています（民芸品「岩角山の撫牛」）<sup>23</sup>

現在、岩角寺には2種類の撫牛が存在する。まず1つは石で作られた大きな撫牛であり、上記の引用文はそれについての説明である。そして、もう1つ、下線部にあるように、大きな撫牛を模して作られた信者に頒布するための撫牛が存在するようだ。これは信者に頒布するというからには、おそらく小さな撫牛であることだろう。先に提示した2つの資料も撫牛を頒布するものであるから、同じく小さな撫牛であっただろう。したがって、小さな撫牛については、1度廃絶した縁起物が復活するという事態が起きていることが報告で

きる。ここでも大きな撫牛についての記述は上記のホームページ以外見ることができず、いつから祀られていたかなど、不明な点が多く、撫牛を頒布していた昭和 10 年には既に安置されていたという可能性も否定できないが、先の 2 つの報告で大きな撫牛が見られなかった点を鑑みると、その可能性は低いと考えられる。

1 度廃絶した撫牛が復活するという事例は他にも見られる。大島氏によって、宮城県の仙台歴史民俗資料館に所蔵されている撫牛の腹中に次のような縁起書が残されていたことが報告されている<sup>24</sup>。

当社伝未（来カ）開運撫牛縁起

この牛を撫でさする時は、吉事未(来カ)家運上昇し火の霊に寄らるべし。

奥州仙台領名取郡南方植松邑

正一位 大明神金剛遊山

文久年甲子稔大族 小稔大家族

弘誓寺<sup>25</sup>

文久年間の甲子といえ、文久 4 年（1864 年）のことである。弘誓寺は宮城県名取市に位置し、神仏習合の影響で館腰神社とその境内を同じくしているが、ここでは、弘誓寺の名前で縁起書を出しているので、おそらく弘誓寺が主となって撫牛を頒布していたのだと考えられる。ここでは火伏せの人形として、小さな撫牛が頒布されていたのだろう。そして、この撫牛は現在、別の形で存続している。というのも、先に紹介した撫牛は小さな撫牛であったが、現在、弘誓寺の撫牛と言え、館腰神社境内にある弘誓寺観音堂の目の前に安置された大きな撫牛のことを指すからである。現在、弘誓寺ならびに館腰神社において、小さな撫牛の頒布は行われていない。この撫牛の復活の過程は齊氏によって細かに記述されている<sup>26</sup>。ここでは、その記述をもとに撫牛復活のいきさつを簡潔にまとめ、再検討してみようと思う。

まず、昭和 53 年（1978 年）に宮城県名取市植松在住のある旧家から左のような古文書が見つかったことがきっかけだという。

〃 館腰神社のご祭神「宇賀野魂神」は稲を荷ひ給えしより俗に御使者神と申し伝える。牛は第一粗食を常となし馬の三増倍を荷いて千里を行く 誠に人民の宝なり。人は是を撫れば忽ち開運富貴に至る縁あれば之を望むなり。背に三つの宝珠あるは伝説に所謂三遍宝珠と言ひ南方の宝生仏を勧請すること也。南の方は陽数を象とり陰を滅し障害退治なすことなり。かくの如く當山の開祖良賢上人館腰稲荷大明神の霊夢を蒙

り給ひて来世の人にこの撫牛を施し給う。人願望を掌にして之を撫づれば開運に至ることのあらましを知らしめんと記して言う ㄥ<sup>27</sup>

そして、この発見により、旧植松村の民間信仰の見直しを行うことになり、また、「この古文書提供の旧家を中心に数名の発願者で、館腰神社の神域を調査して」土中にその大半を埋めてしまっていた臥牛の石像を発見、発掘するに至ったという。そしてその後、当時の弘誓寺住職ならびに館腰神社宮司によって、「先人の遺徳と地藏信仰の復活を願ひ、昭和五十九年二月初甲子日を選び復活祭を執り行ひ、昭和六十年七月の甲子日に弘誓寺観音堂前庭に遷座し、厳かに遷座祭」を行ったという。

以上のようないきさつで弘誓寺および館腰神社に撫牛が祀られることになったようだが、この撫牛復活の過程は当時の人の解釈によって成り立っている部分が多いように思える。まず、臥牛の石像を古文書に記された撫牛と措定している点は当時の人々による解釈であると言える。なぜならば、大島氏の報告によって、弘誓寺で撫牛を頒布していたのは明らかであり、件の旧家の縁起書も頒布された撫牛の縁起書である可能性を捨てきれないからだ。また、撫牛信仰を地藏信仰の一つと捉えている点も当時の人の解釈だと言える。さらに齊氏は、件の縁起書の「いきさつを検討した所、「開運撫牛縁起」と題する文久四年甲子稔大簇の年号ある弘誓寺発行の古文書であることが判明した」と述べているが、これについては根拠が提示されておらず、また、大島氏の報告した縁起書と同年であることから、当時頒布されていた撫牛の縁起書と同じものを根拠としている可能性が高いように思う。したがって、臥牛の石像については、それが撫牛であったという根拠がなく、この復活が正しく縁起書に則った復活であるかについては疑問が残る。

しかし、この事例において強調されるべきは復活の正当性ではなく、撫牛の縁起書が出てきた際に、実物として選択されたものが土焼の小さい臥牛ではなく、大きな臥牛の石像であった点であり、結果として、小さな撫牛が一度廃絶して、大きな撫牛として復活している点である。これは撫牛の当時の認識もしくは実情を示しており、当時、撫牛と言えば、大きな撫牛を指すことが一般的であった、もしくは、当時既に小さな撫牛の存在は忘れ去られていたということが考えられる。

以上のように、撫牛の近現代間における比較を行うと、近代の事例の廃絶が明らかに見られ、また、廃絶後に復活するという過程を見ることもできた。これがすべての撫牛に当てはまるとは断言できないが、近代の主流であった小さな撫牛が現在一般的には認知されておらず、大きな撫牛が主流となっている事態を鑑みると、全国的に同じような出来事が起きているのではないかと思われる。

#### 4. 小さな撫牛の衰退の原因

前章で見たように撫牛のなかには信仰の形が変化したり、一度廃絶したりするものが見られる。この廃絶の時期としては第二次世界大戦戦前から戦後にかけてであると考えられる。この撫牛の変化廃絶の原因を考察するうえで、他の土人形の動向が参考になる。なぜなら、小さな撫牛は土焼で作られることが多く、また、その起源は伏見人形に求められると考えられるからだ。全国の土人形について調査した網氏の研究によれば、南九州地方において、伏見人形から強い影響を受けた佐土原人形や帖佐人形は、第二次世界大戦の戦中に生産が停止し、そのまま一度廃絶して、そして、戦後しばらくたってから復興したという<sup>28</sup>。また、東北地方については八幡人形や中山人形、花巻人形、堤人形について調査が行われ、そのなかで中山人形は第二次世界大戦の戦中に生産が落ち込んでいたという<sup>29</sup>。それ以外の人形についてはその記述はなく、第二次世界大戦との関わりについては不明だ<sup>30</sup>が、土人形の衰退は第二次世界大戦が大きく関わっていると言ってもよいだろう。そして、撫牛もその例にもれず、第二次世界大戦が原因で衰退し、やがて人々から忘れられてしまったと考えられる。

第二次世界大戦勃発の際に、日本政府が国民精神総動員運動と銘打って、国民の思想や生活に介入し、国民の戦争協力を図ったという動きは有名だが、撫牛の廃絶にはこの動きが大きく関わっていると考えられる。例えば、昭和14年(1939年)に打ち出された「物資活用並に消費節約の基本方針」では、不急品、不用品の活用とともに、廃品回収の実施が指示されており<sup>31</sup>、各家庭の撫牛が回収された可能性が考えられる。陶器として考えれば、日用品のためのリサイクルになるだろう。また、昭和15年(1940年)には「不急不用品奢侈贅澤品及規格外品の製造販買が禁止」<sup>32</sup>されることとなり、贅沢全廃運動が起こされた。これによって撫牛の製作が停止されたことは間違いなく、この運動によって有名な「贅沢は敵だ」などという標語も作られるようになる。このような社会情勢の中で撫牛を撫でて吉事を祈るということを行うことができるとも考えにくいから、この運動が撫牛衰退の原因になったのではないだろうか。

#### おわりに

本稿では拙稿をもとに、近代までの撫牛についてまとめ、その後現代の撫牛の事例を紹介した。現代では、近代までは主流だった小さな撫牛はもはや忘れられ、撫牛といえば、大きな撫牛のことを指すようになった。それは千種神社のように、人々によって奉納されることもあれば、大阪天満宮のように、宗教者の与り知らぬところで、人々の類推する力によって拡大していくこともあったと考えられる。

また、同じ信仰、同じ場所において近現代間の事例比較を行い、第二次世界大戦前後で、



撫牛の信仰の変化や廃絶、復活といった事態が見られた。そこで、本稿では他の土人形の動向を参考に、撫牛廃絶の原因を第二次世界大戦中の贅沢全廃運動に求めた。

このように、撫牛は大きな変化や廃絶を伴いながらも、人々の信心によって再興し、変化を続け、さらには今現在も増え続けていると考えられる。しかし、撫牛はなぜ撫でられるのであろうか。撫でるというしぐさにはどのような意味があったのだろうか。撫牛という縁起物を理解するうえで上述のような疑問を解決することは必要不可欠であると考え。撫牛を撫でる意味の解明が本研究に残された課題である。

注

- 1 茶圓直人「撫牛の初出と展開」『日本語・日本文化研究』第29号 2019年 pp.350-359
- 2 保寿軒「本家伝来・開運撫牛縁起」(塩見青嵐『伏見人形』河原書店 1967年 p44-45所収)
- 3 木村虎悦「神授開運撫牛縁起」(注2と同 p46-47所収)
- 4 湯浅隆義『開運撫牛攷—牛神古社探訪記—』蒼洋社 1985年や大島建彦『福神と疫神』(注15)でも同内容の引用があるが、この部分は「<sup>本家</sup>伝来 開運撫牛縁起」となっており、また、塩見自身も「本家伝来・開運撫牛縁起」と紹介しているため、おそらく塩見の引用ミスだと思われる。
- 5 注2と同
- 6 2020年8月3日検索 川崎巨泉『巨泉玩具帖』第1巻第6号 人魚洞文庫データベース (<https://www.library.pref.osaka.jp/site/oec/ningyodou-index.html>) 検索ワード「撫牛」
- 7 毎日新聞地方版／栃木「[渡良瀬]／75 両毛・史跡散歩 高鳥天満宮(板倉町)／栃木」1995年1月27日 2020年9月1日閲覧 「毎索」 ([https://dbs.g-earch.or.jp/WMAI/IPCU/WMAI\\_ipcu\\_menu.html](https://dbs.g-earch.or.jp/WMAI/IPCU/WMAI_ipcu_menu.html))
- 8 撫牛の画像が掲載されていたようだが、毎日新聞社のデータベースである「毎索」では見ることができなかった。以降のものも同様である。
- 9 毎日新聞東京夕刊「[街じゅう図鑑] 臥牛」1994年9月2日 pp.3 以下注7と同
- 10 毎日新聞大阪朝刊「[雑記帳] 神牛像の頭をなでる参拝者が急増—大阪天満宮」1998年2月17日 pp.25 以下注7と同
- 11 だからといって、人々の信仰心が間違っていると主張するつもりは毛頭ない。成立過程がどうであれ、撫牛を撫でて祈る気持ちに正当も不当もないと考えている。
- 12 毎日新聞東京朝刊「ディスカバー東京=牛島神社のなで牛」1971年7月14日 pp.19 以下注7と同
- 13 毎日新聞地方版／三重「なで牛：還暦迎えた住民ら90人、千種神社に奉納—菰野町／三重」2005年2月21日 pp.25 以下注7と同
- 14 2020年9月1日閲覧 検索ワード「撫牛」、「なで牛」「なでうし」同じ内容の記事は1つとした。内訳は以下の通り。  
朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」(<http://database.asahi.com/library2/main/top.php>) 27件中1件、毎日新聞「毎索」(注7) 9件中2件、読売新聞「ヨミダス歴史館」(<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>) 7件中2件。
- 15 大島建彦「撫牛の縁起」『疫神と福神』三弥井書店 2008年 pp.327-339
- 16 大島氏は「同館の理事長の池田萬助氏からご教示いただいた」と述べているが、2019年5月13日に筆者が同館に問い合わせたところ、同館では、現在撫牛の展示はしておらず、おそらく未整理品のひとつであろうとのことだった。
- 17 「縁喜撫牛」(注15と同 p337-338所収)
- 18 柳溪長谷川美材「開運撫牛」『柳津霊境誌』対雲閣 1913年 pp.15
- 19 2020年8月8日閲覧 産経ニュース 2014年9月5日の記事 (<https://www.sankei.com/region/news/140905/rgn1409050062-n1.html>)
- 20 注19と同日閲覧 やないづ観光 Navi (<http://kankou.town.yanaizu.fukushima.jp/highlight/akabeko>)
- 21 佐藤潔『玩具と縁起』人文書院 1935年 pp.56
- 22 『福島県史 第24巻 各論編10 民俗2』福島県 1967年 pp.627-628

- <sup>23</sup> 注 19 と同日閲覧 岩角山ホームページ (<http://iwatsunosan.com/about/precincts/>)
- <sup>24</sup> 2019 年 6 月 19 日に筆者が同館に問い合わせたところ、同館では現在撫牛の展示はしておらず、おそらく未整理品のひとつであろうとのことだった。
- <sup>25</sup> 「当社伝未（来カ）開運撫牛縁起」（注 15 と同 p.336 所収）
- <sup>26</sup> 斉健「開運撫牛について」『郷土なとり(1)』名取市郷土誌研究会 1986 年 pp.22-25
- <sup>27</sup> 注 26 と同 p.23
- <sup>28</sup> 網伸也「〈九州の民俗〉南九州における土人形の由来と継承—佐土原人形と帖佐人形—」『民俗文化(28)』近畿大学民俗学研究所 2016 年 pp.35-68
- <sup>29</sup> 網伸也「〈東北の民俗〉東北地方の土人形の系譜と伝承」『民俗文化(27)』近畿大学民俗学研究所 2015 年 pp.83-118
- <sup>30</sup> 八幡人形は現在廃絶、花巻人形は一度廃絶するも現在復興、堤人形は跡取り問題に悩まされているという。（注 29 参照）
- <sup>31</sup> 国民精神総動員運動民衆教化動員史料集成『国民精神総動員運動Ⅲ』明石書店 1988 年 pp.21-22
- <sup>32</sup> 国民精神総動員運動民衆教化動員史料集成「昭和十五年度 国民精神総動員本部事業概要」『国民精神総動員運動Ⅱ』明石書店 1988 年 pp.178-196